

# 知ろう！ 仏教讃歌

(6)

福本 康之

## 《いちいちのはな》

詞・親鸞聖人御和讃  
曲・大橋 博

は、このときに始まったものではありません。私たちの宗門で、音楽法要として初めて制定された作法「宗祖降誕奉讃法要(第一種)」(昭和38年)においては、すでにオルガンの奏でる響きのなかで「一一ノハナノナカヨリハ」と「弥陀成佛ノコノカタハ」の2首が唱えられるよう、構成されていました。

て、宗門校の生徒を中心につとめられています。特に「一一ノ」のご和讃が各学校の生徒が行う献供の場面で奏でられ、生徒たちで結成された讃歌衆による、その混声四部合唱の響きは、独特の趣があります。

そうした魅力もあって、この楽曲は、同作法の制定以来、各地での法要の献供はもちろん、仏教讃歌《いちいちのはな》としても、演奏される機会の多い作品となっています。

(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長)

## 法要を彩る、ご和讃による仏教讃歌

浄土真宗のおつとめの特徴として、一つにご和讃を唱えることが挙げられます。

本山本願寺のお晨朝(じんじょう)でおつとめする「正信偈和讃」をはじめ、親鸞聖人が遺されたご和讃は、これまでもさまざまな法要で用いられてきました。中でも、750回大遠忌法要に際して制定された「宗祖讃仰作法」は、まさにご和讃を中心に構成された作法です。

また明治以来の近代西洋化のなかで、ご和讃は、《恩徳讃》

など、西洋音楽のスタイルで書かれた仏教讃歌としても親しまれるようになりました。その流れは、やがて宗門における音楽礼拝や音楽法要へと結実していきます。

同じく大遠忌法要に際して制定された「宗祖讃仰作法(音楽法要)」でも、お念仏とともにご和讃が、西洋音楽風の響きのなかで唱えられたことは、記憶に新しいところでしょう。しかし、法要におけるご和讃と西洋音楽の結びつき

この作法は、今日でも本願寺御影堂の宗祖降誕会において



本山の宗祖降誕会では、宗門関係学校(龍谷総合学園)の生徒らが、献供や讃歌衆を担当する



収録CD:『宗祖降誕奉讃法要第一種』  
収録楽譜:『宗祖降誕奉讃法要第一種(楽譜)』(本願寺出版社刊)

※スマートフォン、タブレットなどで上記QRコードを読み込むと掲載曲を聴くことができます。ご加入のプランなどに注意してご利用ください